

6

精神分裂病者を抱える家族員の葛藤

○土岐弘美（高知女子大学大学院）

大林愛（兵庫県立成人病センター）

片岡志穂（高知医科大学医学部附属病院）

福田亜紀（高知女子大学看護学部）

Ⅰ．はじめに

精神保健法への法改正にともない長期入院患者の社会復帰が促進され、精神障害者の生活の場が地域・家庭へと移行している現在、精神障害者と家族が現在抱えている問題、また、これから抱えるであろう新たな問題をどのようにして乗り越えていくのであろうか。我々は、家族の力を支えるケアを考察していくための一助を得るために、精神障害者を抱える家族員の情動面と行動面における反応を葛藤の視点から捉え、葛藤のプロセス・葛藤情態のパターンを理解し、家族員のケース分類を試みた。

Ⅱ．研究方法

研究に対する理解と協力が得られた高知県内の家族会会員のうち精神分裂病者を抱える家族員 16 名を対象とし、半構成的インタビューガイドに従い、1 人 1～2 時間のインタビューを行った。データ収集期間は平成 7 年 7 月 31 日～8 月 31 日であった。対象者のインタビュー内容の中から家族員の葛藤が表れている場面を抽出し、グループ編成、カテゴリー化を行い、葛藤の局面としてプロセスを分析し、葛藤情態の強さや対処行動の特徴より家族員のケース分類を行った。

Ⅲ．結果

A．葛藤のプロセス

本研究では、葛藤を、2 つの思いが拮抗して心理的に不快な状態「葛藤情態」と、それを解決しようとして起こす行動「対処行動」の両者を含むものとした。その結果、精神分裂病者を抱えて生活していく中で葛藤を引き起こす転機となる想起状況に直面したケースは、＜状況の捉え＞を用いて自分を取り巻く周囲の状況を総合的に判断し、多様な思い（葛藤情態の構成要素）を抱く。その構成要素が拮抗することで＜葛藤情態＞に陥り、＜葛藤情態＞の存在が心理的に不快であるため、それを解決しようと＜対処行動＞を起こす。その結果、葛藤が解決される場合もあれば、葛藤が解決されない場合もあり、葛藤が解決されない場合は、その葛藤は持ち続けられ、何かあるごとに刺激され強められていく。家族員はこのような葛藤のプロセスをもつと考えた。

B．ケース分類

葛藤情態の強さや対処行動の特徴より家族員のケース分類を行った結果、理想追求型、現実受容型、現状落ち着き型、抱え込み型の 4 つの型が明らかになった。

a) 理想追求型：家族としての「あるべき姿」や、社会としての「あるべき姿」を強く持っているため、強い葛藤を抱えている。その理想の姿に近づくため、また、近づけるために周囲に変化をもたらしそうと精力的に働きかけを行っている。

- b) 現実受容型：厳しい現実や葛藤を受け入れ、自らの思いと現実の厳しさとの折り合いをつけながら、いろいろな対象に対しての働きかけを行っている。「理想追求型」と比較すると葛藤の強さは弱い。
- c) 現状落ち着き型：これまでの経過の中で、現在の状況より良くなることはないと判断し、現在の安定した状況に満足を得ようとしたり、その維持を図ろうと働きかけている。患者の今後の生活についての見通しがケース自身の中で決着がついており、葛藤は抱えているものの弱い。
- d) 抱え込み型：これまでの働きかけても状況が改善したことが少なく、長い経過を経て悲観的になっている。葛藤を解決しようと周囲に働きかけることをあきらめ、自分で葛藤を抱え込んでおり、強い葛藤を抱えている。

Ⅳ. 考察

精神分裂病者を抱える家族員は様々な困難に直面し、解決されにくい葛藤情態を経験している。これは、既存の家族アンケート調査で示されている結果と共通する。しかし、葛藤のプロセスとその特徴をみていくと、葛藤を抱きながらも積極的に葛藤を解決しようとしている家族員もあれば、葛藤を解決しようとする事さえもあきらめ、さらに負担の大きい状況に置かれている家族員もあった。これは、家族員自身の価値観、周囲のサポートの状態、精神障害者である家族員をどう捉えているか、過去に経験した無力体験や成功体験などの影響を受けていると考えた。

また、ケース分類より、すべての家族員は葛藤情態に対処し、解決する力を持っているが、時に、その力が脆弱であったり、十分な力を発揮できなくなっている場合もあることがわかった。家族の健康は、家族自身が主体的に問題に取り組み対処していくことによって、維持・向上されるものである。よって、我々看護者は、ケースの価値観、今まで行ってきた取り組みを尊重しながら、周囲のサポートを上手に利用するなど、その力を最大限に引き出せるよう支援していくことを念頭に置いて関わる必要があり、同時に、家族員自身が、自分達で決定したことを、たとえうまくいかなかったとしても自分達で行えたという達成感や満足感を高めることができるように自己決定を支える支援を行うことが大切である。

Ⅴ. おわりに

本研究は、精神分裂病者を抱える家族が置かれている現状から起こる悩みや思いを家族の立場から理解しようとしたものであり、家族の様々な反応を葛藤の視点から捉え、精神分裂病者を抱える家族員の葛藤を明らかにすることを目的とした。各々の家族員の葛藤の特徴を、ケース分類することで、精神分裂病者を抱える家族に対して、家族の立場に立って理解していくことに有効な手がかりとなり、看護実践において精神分裂病者を抱える家族に対するアセスメントの視点として貢献できるであろう。今後さらに精神分裂病者を抱える家族員がおかれている状況を理解し、医療者としてどのような援助をしていくべきか考えていく必要がある。